

日本の宗教史上大きな出来

事であった大仏造営には、近江の寺院も大きくかかわっていました。最初に大仏をつくらうとした紫香樂の甲賀寺とともに大きな役割を担ったのが、石山寺でした。今回は、大仏造営と石山寺のかかわりについてお話しします。

聖武天皇は大仏造営事業に

あたり、銅像の表面に鍍金(金メッキ)を施すために大量の黄金を必要としていました。天平19年(747)、後に東大寺の初代別当となる良弁に命じて、黄金が得られるよう、吉野の金峯山に祈らせました。金峯山は「金の山」と信じられていたようなのです。

すると、祈り続ける良弁の夢の中に吉野の金剛蔵王(蔵王権現)が現れ、次のように告げたのです。

「金峯山の黄金は、(56

億7千万年後に) 弥勒菩薩がこの世に現れたときに地を黄金で覆うために用いるものである。近江国志賀郡の湖水の南に観音菩薩の現れる土地がある。そこへ行って祈るがよ

い」と。

夢告にしたがって石山の地を訪れた良弁は、比良明神の化身である老翁に導かれ、巨大な岩に至ります。そして巨大な岩の上に聖徳太子念持仏といわれる六寸の金銅如意輪観音像を安置し、草庵を建て、黄金が産出されるよう祈ったのです。

その2年後の天平21年(749)、陸奥国守の百済王敬福が小田郡(現在の宮城県湧谷町)より、黄金が産出したことを報告し、900両(約12・5キ)の黄金を献上したのです。聖武天皇はこれを「国始まって以来はじめての産金」であると大いに喜び、元号を「天平勝宝」と改めたのです。この出来事は、後に「天平産金」もしくは「陸奥産金」などと呼ばれるようになります。

このように2年越しの良弁の祈りは効果を現したのです。なぜか如意輪観音像が岩山から離れなくなりました。やむを得ず、如意輪観音像を覆うための本格的な堂を建てたのが石山寺の創

天平産金と石山寺



大仏造営に大きな役割を果たした石山寺

岸(現在の天津市国分1丁目付近)に保良宮を造営し始めます。それとのかかわりもあって天平宝字5年(761)から造石山寺所という役所のもとで、堂宇の拡張、伽藍の整備が行われました。正倉院文書によれば、この造営は国家的事業として進められていたことがわかります。

本尊の塑造如意輪観音像と脇侍の金剛蔵王像、執金剛神像は、天平宝字5年から翌年にかけて制作され、本尊の胎内に聖徳太子念持仏の六寸如意輪観音像を納められたといわれています。

創建当時の石山寺は、鎮護国家の仏教と大きなかかわりを持っていました。後には日本でも有数の観音霊場となり、『蜻蛉日記』『更級日記』『枕草子』などの文学作品にも登場するほか、『源氏物語』の作者紫式部は石山寺参籠の折に物語の着想を得たとはいわれています。

日本の信仰史や文化史の中で欠くことのできないお寺、それが石山寺なのです。

(滋賀県教育委員会 畑中英二)

建といわれています。

なお、観音像が離れなくなった岩とは、国指定天然記念物の珪灰石(「石山寺珪灰石」という巨大な岩盤です。後に、これが寺名の由来になるのです。

このように大仏造営事業に大きなかかわりを持った石山寺は、天平勝宝4年(752)の大仏開眼会以降も、歴史の表舞台に姿を見せます。天平宝字3年(759)、淳仁天皇と孝謙上皇が瀬田川右

観音菩薩出現の地で祈り